

教授の研究紹介

教養のたね

西南学院大学の教授が日々研究している専門分野を私たちの「暮らし」に触れて紹介。教授の研究内容をより身近なものにしてみよう。

古地図の中の福岡・博多

【福岡と博多】明治二二年（一八八九）、市制・町村制が施行されて「福岡市」が誕生し、博多も千歳川の間九州鉄道ができて「博多駅」が開業しました。今日に続く「福岡市」「博多駅」の誕生です。福岡市のメインのJR駅名が「福岡駅」でなく、「博多駅」なのは、遠方や外国からの旅行者を戸惑わせず、

然とした長方形街区を作り、短冊形の屋敷地割を行って再興に努めました。さらに黒田氏は「博多浜」と「息浜」の間にあつた低地を埋め立て、「福岡城下町・博多・近隣古図」に見えるような博多の地形を創出したのです。

確かに、佐賀市の佐賀駅や熊本市の熊本

駅などという呼び方に比べると、違和感

がありますが、そのことが福岡と博多の

成り立ちの違いを伝えています。

【博多】中世期に日本有数の海外貿易港として繁栄した博多は、当時二つの地域からなっていました。内陸部の「博多浜」と北部沿岸部の「息浜」があり、新興の「息浜」がしだいに発展していき、一六世紀には大友氏が両者を統一しました。

そして、その家臣白杵安房守がそれまで博多の南側を流れていた御笠川（比恵川）をつかえて、まっすぐ海に流れる人工の川（石堂川）を通し、南側には防御のために堀（房州堀）を設けて、堀と同じような要塞都市として整備しました。この博多をめぐって、肥前の龍造寺氏、薩摩の島津氏が攻め入り、焦土となった博多の再興をはかったのが豊臣秀吉です。

天正一五年（一五八七）、秀吉は博多の街路を付け替え、整



文化9年(1812)「福岡城下町・博多・近隣古図」(九州大学蔵)

【福岡】福岡は、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原戦後に豊後国

中津から筑前国へ加増転封となった黒田氏

の居城として整備された新都市です。黒田長

政は、前領主小早川氏の居城であった名島城

に入りましたが、手狭であり、翌年から「福

崎」の地に新たな城を建設し始めました。こ

こは、一世紀頃まで存続した大宰府鴻臚館

のあった地であり、当時は荒戸山（現在の西

公園）の東に開く広大な入江に面した丘陵地

であり、農村・漁村が広がっていました。黒田

氏先祖の地にちなんで名付けられた「福岡」

の建設は、慶長六年から隣藩の鍋島氏などの協力もあって始

まり、同七年には福岡城が、同八年に福岡の外郭ができて家

臣や町人の居住地が整備され、同一三年をもって完成したと

いいます。

福岡と博多は、成立の経緯や住民構成のあり方が異なり、そ

の他にも博多祇園山笠などの祭礼に大きな差異があります

が、ともに城下町図としてセットで描かれることが多いです。

PICK UP BOOK

教授
オススメの本



『ケンペルやシーボルトたちが見た九州、そしてニッポン』

宮崎克則著：岩海鳥社 2009

ケンペル、ツェンペリー、シーボルトが残した日記・文献から浮かび上がるニッポン。風俗、産業、宗教観、日本人との交流…。江戸の日本人は「勤勉」「親切」だったか。古文書講座に集う主婦や退職された方々、そして九大院生とともに本書を作りました。



国際文化学部国際文化学科 教授

宮崎 克則 みやざき かつのり

九州大学大学院文学研究科史学専攻博士課程修了。文学博士。専門分野と研究テーマは、日本近世史、異文化交流史、民衆文化論。1998年ごろから非常勤講師として本学に来ていました。編著書に、『古地図の中の福岡・博多』（海鳥社、2005）、『ケンペルやシーボルトたちが見た九州、そしてニッポン』（海鳥社、2009）。

